
AGAINST THE STREAM

紀昶瀨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AGAINST THE STREAM

【Nコード】

N4480D

【作者名】

紀廻瀬

【あらすじ】

人間が己の知らぬ間に発している運命の記憶 通称『流れ』。それに触れることでその人間の人生を覗き見ることができる少年、アズミヤ・テイト天宮燈徒は友達が死んだ日の翌日、街で見た事のない色の『流れ』を見付けて……

P r o l o g u e (前書き)

注意：一番最初の質問は本気になって考えなくても大丈夫です。
前口上のようなモノだと思って下さい。

Prologue

コレヨリ、アナタニ質問ヲシマス。

(読むのならば下に、読まぬのならばブラウザを使

いお戻り下さい)

ヨロシイデスカ？

YES or NO

1 アナタハ、アナタガ居ル世界が好きデスカ？

YES or NO

2 アナタハ、家族が好きデスカ？

YES or NO

3 アナタニハ、大切な人がイマスカ？

YES or NO

4 アナタ二ハ、宝物ガアリマスカ？

YES or NO

5 アナタハ、神ヲ信ジマスカ？

YES or NO

6 アナタハ、人ヲ信ジルコトガデキマスカ？

YES or NO

7 アナタハ、死ンデモ守リタイ人が存在シマ

スカ？

YES or NO

8 アナタハ、人ヲ愛シタコトガアリマスカ？

YES or NO

9 アナタハ、自分ノコトガ好きデスカ？

YES or NO

10 コレデ最後デス。アナタハ、世界ヲ捨テル

コトガデキマスカ？

YES or NO

「天宮、お前さ……高校出た後のこと全く決めてないんだって？」
「……」

呆れた様に言う『友達』は、その言葉を無視した俺に対して、溜息をつき俺の隣に腰を降ろした。

「いい加減先のことも決めろよ。じゃなきゃ、困るのお前だぜ？」

「別に困らないさ。先のことなんて、今から考えても面倒なだけだろ」

「あのなあ……そんなんじゃ今の御時世生きていけないぜ」

困らない物は困りはしないのだ。誰がなんと言おうと、俺のこの考えかたが変わることはない。だって俺は今を生きるので精一杯なのだから。誰にも教えないけど。

「流れを頼りにすれば……困ることなんかないから」

「オレにはお前の言う流れってのは良くわかんねえな」

物心ついた頃から俺にだけ見える『流れ』がある。ガキの頃は他の人にも見えるのだと思っていたこの流れは、成長するにつれどんどんハッキリと見えるようになっていた。18の今では瞼を閉じていても暗い闇の中で様々な色をした『流れ』が見えるようになってた。
「（ほら、今も）」

視界を掠める紐のようなその『流れ』は、子供の時に友達ができなかった俺にとって遊び相手の様なモノだった。自分から触ろうと思っただけ触れれば、映画でも見るように『他人の人生』を見せてくれた。それは幸福なものばかりだったけど、極稀に、とても悲しいモノが混じっていたりした。

「（そんなに他のヤツに見せたいのかよ。バカじゃねえの）」

意識して見ないようにし始めたのは高校に入ってから。圧倒的に多くなつた『不幸』に気味が悪くなってるべく避けるようにしていた。他人の人生が見える。人が傍にいと、この『流れ』はもっ

と増える。

「オレは人に流されるのはやだな……他人に決められる運命つてやつ？　なんかウザくね？」

「俺に同意を求めんな馬鹿」

「なんだよー。別に良いじゃんか」

「良くねえから言ってるんだろ」

からかうように俺の傍らで笑うコイツも例外ではなく。さっきからチラついている『赤い流れ』はコイツの人生だ。中学になってからわかったことだが、この流れについている色は内容によって決まっているみたいだった。大きく二つに分けると『幸運』と『不幸』。幸運の場合色が『青』に近くなり、『不幸』なら『赤』に近くなる。コイツのは完璧な赤だから、幸せにはなれないな。

「でもさー、お前その流れが嫌いなんだろう？」

「まあな」

「じゃあ、なんで頼るんだ？」

「……自分で選ぶのが面倒だから」

なにもかもが曖昧で、決して現実味を帯びることの無いこの世界は、きつと流れが見えるからなんだろうと思う。俺は生きてる筈なのに、『流れ』と同じように見えて仕方がなくて。触ろうと思っても触ることができない、っていうことが現実になるのが怖くて、どうしても一線を引いてしまう。

「面倒ってお前な……まあ、それが天宮の良いところなのかもしれないけどさ」

そう言っただけで笑う『友達』が、次の日には死んでいるなんて何時もの事で。

「あーあ……また死んだ……。コイツは『流れ』を信じてくれる『友達』だったのに」

悲しいなんてことはない。だってもう慣れてしまったから。でも……でも、ほんの少しだけ、悲しいかもしれない。

「また『友達』が減るなあ……ま、その方が見える俺にも、見えな

い他人にも良いのかもな」

昨日まで話していた筈の『友達』が死んだのを聞いたのは家に帰ってから。テレビのニュースで下校途中に交通事故にあって即死したらしい。やっぱり見なくて良かった。アイツの流れを見ていたらきつと死の恐怖を味わう事になっていただろうから。幸せの流れは見ても客観的な感情しか湧かない。それに反して不幸の流れ……特に『死』の流れは実際に自分が体験しているかのような感覚に陥る。だから嫌いだ。

「……今日はサボるか」

それでも学校に行く途中だったりするのだ。でも、気分がのらないから止めることにした。機械的に動かしていた足をピタリと止めて、どうしようか。少し街を動き回るか。そうすればこのなんだかモヤモヤした気持ちも晴れるかもしれない。

「……？　なんだアレ……？」

暫く当ても無く歩いていたら、目に入ったソレは、今まで見た事の無い『流れ』だった。

「真っ黒じゃん……」

そう。ソレは今まで見てきた有彩色ではなくて、完璧な『黒』だった。しかもそれは誰かに着いているのではなく、何も無い筈の上から……空から伸びているのだ。揺れるまでも無く、ただそこに静止している。

「……棒？」

普通の物なら目を閉じれば見えなくなる筈だが、これは見える。と言う事はやはり『流れ』なんだろう。ほんの少しの興味心で近付いてみる。

「どんな人生だろう……」

高校に入ってから触れたくないと思っていた筈の『流れ』でも、どうしても触ってみたいと思ってしまった。見た事の無い色を持つそれは、どんな他人の人生なのだろうか、と。

まるで操られた様にゆっくりとそれに手を伸ばす。後少しで手が

届く、と思ったとき。

「危ないッ！！！！」

「え？」

悲鳴にも似た叫びに我に返ると、同時に襲った衝撃と激痛。触れ
様と思った黒の流れに垣間見えたのは、暗い笑いだった。

c o n t i n u e d

T o b e

Prologue (後書き)

はじめまして、紀迺瀬と言います。この度この『AGAINST THE STREAM (アゲインストザ ストリーム)』をお読みくださって真に有り難う御座います。しかし、これは私の気まぐれにより更新するのに果てしない時間を要する事になる可能性があることをご了承下さい。

さて、この『AGAINST THE STREAM』ですが、意味は『流れに逆らって』です。意味が間違っている、スペルが違うなどありましたら遠慮無く言って下さい。それでは、また次の機会にお会いしましょう。

第一流

眠れよ眠れ良い子は眠れ

眠るな寝るな悪い子寝るな

良い子よ良い子優しい夢を

悪い子悪い子怖い夢を

悪夢を見るの

は悪い子じゃ

正夢見

るのは良い子じゃ良い子

お主の夢はどつちかえ？

第一流 『天空を舞う鳥の様に』

「ッ?!」

ガバツ、という効果音をつけて起き上がれば、そこは見た事も無い部屋だった。

「……………どこだ、ここ」

記憶に掠りもしない、妙に和風な造りの部屋を見渡して、俺は呆然と呟いた。その呟きは誰に聞かれるまでもなく消える。ふと、ここで気付く。

「『流れ』が……………見えない?」

何時もは鬱陶しいくらいに視界に割り込んでくる色が見えずに、俺は困惑した。そして同時に感じた感情に、更に驚愕する。噓だ、寂しいなんて思う訳がない。

「どうなっただよっ……………!!」

唸る様に吐いた言葉は、突如外から聞こえた騒音に掻き消された。ドタドタ、バタバタバタ。騒がしい足音がこの部屋に近付いてくる。そうか、この襖の先は廊下なのか。

「……………」

無意識の内に息を潜めて様子を伺うと、その足音はこの部屋の前で…………俺の左横にある襖の向こう側で止まり、数秒の沈黙の後、静かに襖が引かれた。そして現れた先ほどの足音の主は、女。

「はじめまして、御初に御目に掛かります神童様。わたくし、神谷（カミヤ）と申しますわ、神童様」

はて、この女性は一体誰に話をしているのだろうか。確かに俺はこの人を知らないから、はじめまして、はあっているだろう。だが、『神童』とは、誰の事なのだろうか。

「? どうかありませんか、神童様」

「……………その『神童』とやらは、もしかして俺の事か?」

「はい。然様に御座いますわ。神童様」

なんだろう、この人の笑顔がとても眩しい。後ろに効果音が見える気がしてならない…………いや、そんなことは此の際どうでも良い。

一番の問題は

「神童がどうっていうのは後から聞くとして……ここはどこだ？」
今の現在地がわからないことには対処のしようがない。『流れ』
が見えないのなら尚更。拉致られてきた訳じゃあるまいし、多分日本
のどこかなのだろうけど。

「……申し訳ありませんが、そのことに関しては、わたくしの口か
ら申す事はできません」

「じゃ、誰に聞けと？」

「わたくし共の当主である、青杏（セイアン）様に」
聞けなかった。これで逃げるという選択肢は俺の脳裏から消え、
残ったのは諦める、というモノだけ。さて、どうしよう……と、待
て。俺は一体どうしてここにいるんだ？

「（俺、目が覚める前までなにをしていた？）」

思い出せ、俺は何を、していた？

「死んだ……筈じゃ……」

血の気が引くのを感じた。喉が乾く、息が苦しい。気を失う前の
出来事がフラッシュバックする。そうだ、俺は

「神童様」

「！」

掛けられた声に顔を上げると、そこには少しだけ心配そうな色を
乗せた笑みでこちらを見遣る神谷という女性。何かを言おうと思っ
たが、完全に渴いてしまったらしい喉は、言葉を紡ごうとする意思
に反して空気を漏らすだけだった。

「まずは青杏様にお会い下さいまし、神童様」

「……」

言われた言葉に少し間を開けてから頷く。だってそれしか、選択
肢はないのだから。俺がどうなったか云々はそのセイアン、とやら
に話を聞くことにしよう……自分で考えると深みへ落ちてしまいそ
うだから。

「それでは、これを御羽織りくださいまし。御水を御持ち致します

わ

どこから、と問うべきではないのだろうが、敢えて問いたくなる。彼女の手には一着の羽織り。本当に一体どこからそれを取り出したのだろう。暫し呆然としてみると、彼女は俺がまだ下半身を潜らせている布団の脇に、静かにそれを置くと、ニコリ、という効果音がぴったりの笑顔を浮かべて部屋から出て行った。勿論、襖は閉めて行ったが。

「……」

無意識の内に詰めていた息を細く吐き出す。なんでだろう、とても疲れた感じがするのは。深呼吸して改めてあたりを見回して見る。まるで時代劇にでも出てきそうな雰囲気なのは、きっと俺の気の所為ではないのだろう。それにちよつとした喪失感を覚えて（どうして？）しかしこのまま意識を飛ばすこともできなくて。唾を飲みこみ喉を少し潤した後、結局、俺は置かれた羽織を手にとった。

「普通に羽織るだけで、良いんだよね……」

淡い緋色のソレに腕を通して、否、通そうとして、俺は今の自分の服装に気付いてピタリ、と動きを止めた。意識を失う前、確かに着ていたのは制服だった。季節は秋で、白を基準としたシャツと上着、襟や裾の部分には学年ごとに違う色のリボンを通し（確か俺のソレは黄だった）、紺のゆつたりとしたズボン。全てが学校指定のソレだった筈だ。だが、だったら、今俺が着ているのはなんだ？

「……………赤い」

そう。白を基準としたそれらは全て真っ赤に染まっていたのだ。余す事無く、シャツと上着は完全に紅に染まり、紺のズボンも所々変色していた。まるで、元からそうだったように。

「……………血か？」

恐る恐る、紅く染まった上着を触ってみる。濡れた感触は無い。血、独特の鉄のような匂いも無い。生身を確認してみても、これと言った外傷も無い。じゃあ、これはなんの赤なんだ。

「……………情報が少ない。今の俺では、答えは出せない」

今自身が置かれている状況さえ把握できていないのに、その延長線上にある問題を先に理解出来る筈が無い。俺はそう考えて、羽織りに腕を通した。ふう、と軽く息を吐いて、かけ布団を退かして立ち上がる。ふらり、とよろめいた足に顔を顰めて、しっかりと足を畳につけて軽くストレッチを試みた。

バキボキと音がする。俺はどのくらい眠っていたのだろうか。

「神童様。失礼しますが、宜しいでしょうか」

「……ああ」

少し経ち、布団をどうしようかと悩んでいると、襖の向こうから声をかけられた。神谷……彼女の声だ。間を置いて返事を返すと、襖が引かれ、彼女が姿を現した。緩く纏められた長い黒髪がさらりと揺れる。

「御水を御持ち致しました」

「……有り難う」

笑顔で差し出された盆の上にはありきたりなガラスのコップ。並々と注がれた水がたぶん、と音をたてて軽く揺れた。礼を言ってそれをとり、一気に煽って喉を潤す。冷たい水が喉を通り、イライラと落ち着きのなかった思考がゆっくりと収まっていくのを感じる。細く息を吐いて、もう一度礼を言い、コップを返した。

「では、青杏様の元へと、ご案内させて頂きます」

絶えず笑顔で言った彼女は、流れる様な動作でコップをのせた盆を持ったまま立ち上がり、廊下へとでた。諦める事も人生の内では大切なのだと言ったのは誰だったか。思考の隅で考えながら、彼女の後へと続く。俺が部屋から出ると同時に閉まった襖に、特に気を配る訳でもなく、盆をするすると裾を引きながら歩いていた他の女性に渡していた神谷に視線をやる。女性は神谷に頭を下げ、俺を視界に入れると、俺にも深く頭を下げた。そして立ち去る女性の背を見遣り、俺は神谷へと目を向ける。

「それでは、参りましょうか」

素人が見てもわかるほど質の良いだろう木材が張られた廊下を歩

きながら、どこかの城の様な細かな装飾が施された柱や天上、壁などに視線をやる。蓮、菊、竜、虎、蝶。事細かに彫られた彫刻や良く分からない模様が至るところで見られるのはどうかと思うが、ともすれば寺や神社の如く質素な造りの渡り廊下を歩いたり（それでもやはり材質は良い物の様だったが）中庭らしき場所は枯山水だったり普通に池があつて鯉らしき魚が泳いでいたり、とやはり理解し難いもので溢れていた。そしてどこに行こうとも、やはり、『流れ』が見える事はなかった。

そして約二十分、と言つたところだろうか（もつと長かつたような気がしなくもないが）迷路の様な廊下を歩きまわり着いたのは床の間のような部屋。（しかしそこまでにはただっぴろい通路があるが、これも部屋なのだろうか）上座には暖簾越しにだが誰かが座っているのが見えた。

「青杏様。神童様を御連れ致しました」

俺の数歩前にいた彼女は、そう言つて暖簾の向こうにいる人物に頭を下げ、そしてやはり俺にも頭を下げてから脇へと退いた。そこでこの場に、ざっとみ三十人程度だろうか、それ程の数の人がいることに気付いて、軽く瞠目する。これだけの人がいることに気付かなかつた自分に吃驚だ。やはり、『流れ』が見えないところも違うものの、か、と絶望にも近い感情を抱く。（それが何に対してなのか、俺は知らない）鬱陶しい、と思考を切り捨てて、上座へと大股で歩み寄る。ざわざわと周りが囁くが、そんなことを気にしているほど暇じゃない。

「アンタか。青杏とかいうのは」

暖簾の5m程前で立ち止まり、睨む様に目を細めて暖簾の向こうにいる人物を見据えて言つた。ざわめきが強くなる。知つた事か。

「俺は何故ここにいる？ 何故ここでは『流れ』が見えない？ こはどこでなんなんだ？ 教える、俺に、余す事無く全てのことを」

偉そうな口調になつてしまつたがこの際だ。猫を被るのも面倒。不敬だと捕らえられるのならそれでも良い。本当なら……死んでい

たはず。俺が何故生きているのか、ここはどこで、こいつらはなんなのか。答えが欲しかった。だから問う。周りの視線など、言葉など、慣れすぎてしまった。そんなものはもう俺を動かさない。知りたいのは、真実。

「……教えましょう。貴方が知りたいと願う全てを。私の名は、青杏。この『狭間の世』を統べる四天の神子のひとりです」

暖簾が引かれ、現れたのは日本人にあるまじき深い青をした髪と瞳を持つ、どこか圧倒されるような雰囲気青年だった。彼は淡く水色が入った直綴の上に白いまるで十二単の様な（しかしその全ては青みがかった白だ）ものを羽織っていた。

彼の容姿がどうと言うのはもう止めにして。彼の気になり過ぎる言葉に、眉を寄せる。

「……狭間の世？　なんだそれは」

「その通りの意味ですよ、神童殿。世界と世界を繋ぐ場所。常世の国……とも呼ばれますね」

問えば、聞いた事のある単語が返ってきて、眉を顰める。

「海の彼方にあると言われる理想郷のことか？」

「はい」

常世の国（とこよのくに）とは、先ほど俺が自身で言った様に、海の彼方の理想郷などと呼ばれる事がある。他にも『海の彼方にある異世界』、『死後の世界』、『神仙境』、『永遠の命をもたらす』、『不老不死の世界』あるいは『穀霊の故郷』などと信仰的な呼び名が多い。何故知っているか？　嘗て『流れ』で見たことがあったから、覚えていただけだ。

「貴方の力について、話しましょうか」

「！　俺が、『流れ』を見ることができのを知っているのか？」
いや、この場合は『流れ』を知っているのかと言う事を問うた方が良いのかもしれない。脳裏にそんな言葉が過ったが、言った言葉を訂正しているほどの余裕も無かった。そんなことよりも早く知リたかったのだ、何故こんなものが俺だけに見えるのか。何故、俺な

のか。

彼は柔らかな笑みから真剣な面持ちへと表情を変え、言う。

「貴方は私達、四天の神子がそれぞれ奉る神に、この狭間の世を、世界を、全てを総じて統べる者に選ばれたのです」

言われた言葉に思考が固まる。なにを、馬鹿な。ちっけな存在でしかない筈の俺が、そんな大層なものになれるわけがない。

「嘘などではないのです神童殿。貴方はこの狭間の世に来るべくして生まれた、神の子なのです」

何を根拠にそんな言葉が言えるのか。

「貴方が今までに見たモノは、神が貴方に与えた試練の様な物。貴方が人の生を知り尚平常でいられるか試す為のものだったのです」

彼のその言葉に愕然とした。なんということか、俺は今までそんな訳のわからない、望んでもいないものにされる為に『流れ』が見えて……否、見せられていたというのか。

「本来ならば、もっと歳を重ね世界を見ることができるようになれば必然に死が訪れている筈でした。しかし、今回の貴方を妬む物が邪魔をしたのです」

ではあの黒い『流れ』は最初から俺を殺すために置かれたのか。と言う事は、だ。どうやら俺はこいつ等の良い様に踊らされていたと言う事になるわけだ。なんとまあ、滑稽なことが。

「一度死した者は幾等神の子と言えど同じ世界へ、再び生をもたらす事はできないのが私達の決り」

握り締めた拳が震える。怒りとも呆れとも、悲しみとも取れない感情が胸に広がっていく。

「ですから、貴方には今一度、新たに、しかし違う生を与えます」

それが自分の使命なのだと言いたそうな身振りで、青杏は言う。きつと彼は知らないのだろう。彼はそれが最善だと信じ、疑う事をしていない。俺にとって傍迷惑極まりないことを、最初の真剣な表情に昂然とした薄い笑みを浮かべてそんなことをのたまっているのだから。

「その世界では、あまり流れを拒まれませぬ様。御気をつけ下さいませ」

最終的には満面の笑みを浮かべた彼を睨み付けると同時に、引き摺り込まれるような感覚を受け、俺の意識は暗転した。

T o b e c o n t i n

u e d

第一流（後書き）

こんにちは、紀廼瀨です。さて、やっと第一話が出せた訳ですが、大分時間がかかってしまったことをここにお詫び致します。しかし、前回のものを見るにあたってその辺りはご理解頂けると願っているので次回からはいくら間が開こうとも謝罪はいれないかもしれません。ご了承ください。

テイト君……名前が出てきませんでした。次回からはちゃんと出てきます。もしかしたら姓が違うものになっている可能性もありますので、そこらへんもご理解下さい。それでは、次回に、またお会いできる事を心より祈っております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4480d/>

AGAINST THE STREAM

2010年12月18日18時01分発行